

戦争と平和を 考えるⅡ

第1回

9月15日[土]

開講式 12:50~13:00

- 13:00~14:50 「木下尚江と日露戦争—『火の柱』を手がかりとして「平和学」を考える」
竹森正孝（比較政治学・比較憲法学）
- 15:00~16:50 「〈いのち〉への感性を育てる—歴史の記憶を、若い世代にどう伝えるか」
近藤真庸（健康教育論）

第2回

9月22日[土]

- 13:00~14:50 「古代中国における「厭戦」思想」
松尾幸忠（中国古典文学）
- 15:00~16:50 「日本国憲法9条と良心的兵役拒否」
近藤 真（憲法学）

第3回

9月29日[土]

- 13:00~14:50 「ウォー・ゲーム—情報管理社会における戦争の正常化と美化」
ジョン・G・ラッセル（文化人類学）
- 15:00~16:50 「原民喜訳『ガリバー旅行記』を読む」
内田 勝（18世紀イギリス文学）

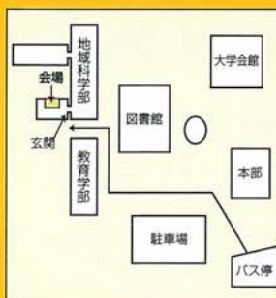
第4回

10月6日[土]

閉講式 16:10~16:50

- 13:00~16:10 「ドイツとの比較にみる日本の近代／戦争／文学」
林 正子（日本近代文学）

- 会 場 岐阜大学地域科学部（岐阜市柳戸1番1）1階 地101教室
- 受講対象者 関心のある方なら、どなたでも受講できます。
- 定 員 50名（定員を超えたときは、お断りすることがあります）
- 受講料 7,200円（学生 6,000円）
（納入後の受講料はお返できません）
- その他 3回以上受講された方には修了証書（岐阜大学）を授与します。



- 申込み方法 受講を希望される方は、「住所・氏名・年齢・電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申込みください。受講料納入方法（銀行振込）については、お申込みいただいた後にご連絡いたします。

ご連絡いただいた皆様の情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合には、下記にご連絡下さい。

- 申込み期限 9月5日（水）
- 申込み・問合せ 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1
岐阜大学地域科学部総務係
TEL：058-293-3003
FAX：058-293-3008
E-mail：chiiki@gifu-u.ac.jp

第1回 9月15日(土) 開講式12:50~13:00

13:00~14:50

「木下尚江と日露戦争—『火の柱』を手がかりとして「平和学」を考える」 竹森 正孝

「平和学」がひとつの学問分野として定着してかなりの時間がたちます。戦争が最大・最悪の暴力であることは論をまたないのですが、この世界に「構造的暴力」がなくならないかぎり、ほんとうの意味での平和を語ることはできません。そこで、日露戦争の前夜、差し迫った状況下で戦争反対を訴えた木下尚江とその作品を手がかりに、戦争、差別、貧困、環境破壊などと真正面から向き合ったひとりの人物と彼を取り巻くひとびとが何を課題とし、何と向き合ったのかを明らかにしてみたいと考えました。かの時代に問われた諸問題が、現代における「戦争と平和」の課題と通底していることを知ることも、それなりに意味のあることのように思われます。富国強兵をベースに近代日本の建設を追い求めてきたわが国に、悩み、苦しみ、挫折感を味わいながらも、もうひとつの道、反戦や小国主義、自由と平等を追求してやまなかったひとびとがいたこと、このこと自体が私たちの貴重な財産ではないでしょうか。

第2回 9月22日(土)

13:00~14:50

「古代中国における「厭戦」思想」

松尾 幸忠

戦争と平和というテーマは、今日の我々にとって非常に身近な問題として認識されていますが、古代社会の人々にとってはどのような形で認識されていたのでしょうか。この講座では古代中国における戦争と民衆との関係という視点から、中国古典詩における該当作品を取り上げ、考察してみたいと思います。中国も昔から戦争に明け暮れた国でした。古典詩の中にも数多くの戦争を詠んだ作品が遺されています。国威を発揚するための勇戦的な詩、夫や子どもを戦争にとられることを嘆き悲しんだ詩。特に心を打つのは、家族をむりやり戦争にかり出される庶民の嘆きを歌った詩でしょう。そこに見られるのは、今日我々が唱える「反戦」という積極的なものではなく、むしろ「厭戦」とも言うべき嘆きの発露でした。この庶民の嘆きを彼らに替わって詠んだ社会派詩人の代表として唐代の杜甫がいます。今回は、その杜甫の作品を中心に、中国における厭戦思想の系譜を辿ってみたいと思います。

第3回 9月29日(土)

13:00~14:50

「ウォー・ゲーム—情報管理社会における戦争の正常化と美化」 ジョン・G・ラッセル

現代情報社会においては、海外で起こる戦争が、いわゆる「先進国」にとって他人事のようなものと見慣れてしまった一方、自国と遠く離れた「後進国」にある戦場は、一種の娯楽と恐怖の対象となっています。これは自国が助長する自他像を強化することによって戦争を正常化することを意味し、その戦争の正常化のプロセスには、情報と映像の戦略的な操作と管理が大きく機能しています。その操作と管理のプロセスには、暴力の利用を正当化して本来の暴力行為である戦争を美化し、正常化する作が見られます。武装の正常化が地理政治の領域を超え、社会のあらゆるところに染み込んでいき、実際の戦争が、メディアと政府に管理された情報と映像によって国民の視線と記憶から隠蔽されつつある一方で、ビデオ・ゲームや玩具などという戯れる媒体では戦争がより現実的に描かれています。本講義では、「反テロの戦争」を中心に、21世紀における戦争・武装の正常化と美化について検討します。

第4回 10月6日(土) 開講式16:10~16:50

13:00~16:10

「ドイツとの比較にみる日本の近代／戦争／文学」

1870年前後から第二次世界大戦までの、いわゆる近代という時代状況について、日本とドイツは、多くの共通点や対照性を示しています。この講義では、国民国家統合から帝国主義的膨張を遂げ、近代の超克をめざして全体主義体制を構築し、戦争へと突入していった日本とドイツの近代の歴史を比較対照的にたどることによって、日本とドイツにおける戦争の歴史的背景と思想的要因を検討することをめざしています。具体的には、明治期の森鷗外、大西祝、高山樗牛、姉崎正治、

15:00~16:50

「〈いのち〉への感性を育てる—歴史の記憶を、若い世代にどう伝えるか」 近藤 真庸

「〈いのち〉と人権の教育学」の立場から、「健康教育論」講義(高等学校での「保健」授業実践を含む)の内容・方法を構想するようになって30年。本学部の講義(対象:3年生)では、「受胎調節」「水俣病」「ハンセン病」「HIV/AIDS」「脳死移植」「死刑制度」「被害スモン」等のテーマにとりあげ、受講生に、それらの“事件”を当事者の視座から歴史的追体験させることで、社会科学的分析力とともに〈いのち〉への感性を育てることをめざして実験的实践を重ねてきました。今回の公開講座では、「歴史の記憶をどう伝えるか」という観点から、「共感から分析へ」という方法的視点および「歴史的追体験」という手法によって教材化した授業をみなさんに“追体験”していただくことにします。学生が何を感じ、どのように学んでいったかを紹介しながら、「戦争の記憶」を若い世代にどう伝えるか」という方法について、いくつかのヒントを提示してみたい、と考えています。

15:00~16:50

「日本国憲法9条と良心的兵役拒否」

近藤 真

1960年に始まったベトナム戦争では、1966年の北爆開始以降、アメリカで反戦運動が急速に高まり、徴兵カードを焼くものが急増。ベトナム戦争末期にはついに100万人の兵隊を集めるのに230万人に徴兵カードを配布しなければならなくなったといわれます。130万人が徴兵拒否をしたからです。これによってアメリカのベトナム戦争敗北は不可避とされました。ホーチミン率いる北ベトナムの団結力が強かったというだけではなく、アメリカが道義的に自己崩壊したことこそ敗北の真の原因があったのです(オーバービー)。戦後、日本国憲法9条は、国家に戦争放棄を義務づけることによって、国民に平和的生存権(前文)を保障したものであるとする考え方があります。それは、とりもなおさず、一種の良心的兵役拒否国家宣言であり(小田実)、もし日本が戦争に加担するようなことがあれば、国民に良心的兵役拒否の権利を保障するものなのです。良心的兵役拒否の権利とは何か、一緒に考えてみようではありませんか。

15:00~16:50

「原民喜『ガリバー旅行記』を読む」

内田 勝

『夏の花』(1947)などの原爆文学で知られる作家の原民喜(1905-51)は、その最晩年にジョナサン・スウィフト(1667-1745)の諷刺小説『ガリバー旅行記』(1726)を子ども向けに抄訳しています。この小説の中で、高度な文明を持つ馬の国を訪れたガリバーは、人間そっくりの醜く卑しい動物ヤープに出会い、人間そのものをヤープと見なして軽蔑するようになります。彼は自分の主人となった馬に向かって人間の愚かしさを述べ立て、話題が戦争に至るとこう語ります。「[意見の違いから生じる]馬鹿馬鹿しい争いから、何百万という人間が殺されるのです。しかも、この意見の違いから起る戦争ほど気狂じみてむごたらしいものはありません」。この講義では原民喜の抄訳をきっかけにして、さらに深くスウィフトの原作の世界に分け入り、原民喜がえて訳さなかった部分を含めて、原作者スウィフトの戦争観・人間観を探ってみたいと思います。

林 正子

金子筑水、桑木嚴翼、大正・昭和期の和辻哲郎、勝本清一郎、鹿子木員信、久松潜一ら、近代日本の哲学者・文学者のドイツ留学体験と文筆活動を紹介し、近代化と国民化の同時展開状況、社会主義・アナキズム思想の動向、第一次世界大戦後のリベラルな政治文化の開花、第二次世界大戦に関わる〈近代の超克〉思想の台頭など、近代日本の精神文化におけるドイツからの影響の諸相を考察したいと考えています。